

紹介

●日本服飾史

櫻井 秀著

服飾史に關する著述で從來世に出でたものは比較的稀であつて、斯界は尙ほ未開拓の儘に置かれてあると謂つてよい。著者は夙に此の方面に着目し、廣く舊記古書を探つて之が發達推移の狀況を考究されつゝあるが、其の一業績として現はれたものが即ち本書である。先づ總論に於ては先人の服飾史研究の回顧、補助學科、時代別と其根據、服飾史の資料を概説してある外、人類服飾の起源及分化、西人の服飾分類に於ける日本服飾の位置を述べ、人類の出現、日本人の構成に就いて概要を述べてあるのは廣き意味に於ける服飾の觀念を讀者に與へん爲であつて、行届いた著者の注意が看取される。本論に入つては、上代日本人の生活に南方的色彩の濃厚である事を認めて其の服裝に就いて詳述し、更に北方系の服裝に就いても述べ、又應神帝前後朝鮮半島からの文化の流入に依

つて我が服飾界に重大なる變化が起り、推古朝大陸との交通により更に急速なる進展を見る事となつたこと述べて其の以後に於ける服飾界の變遷を通觀し、平安朝は之を初世(寛平延喜の頃迄)、中世(承平天慶から院政の出現後迄)、季世(堀河院頃以後)の三期に分つて各期の社會及び生活の特徴より男女服裝の種類、構成、推移等について述べてある。其中に袍の縫腋は文官所用のもの、闕腋は一定の範圍に於て武官の着用したものである事、當色袍と位袍とは別物である事、椽袍の由來及び其れが位袍と別物であつた事に就いて古來の誤解を正してあるのは注意すべきである。但し椽袍の椽の字が椽となつてゐるのは誤植であらう。次に鎌倉時代と室町時代の文化の特質を叙して舊型服飾の推移と新型服裝の發達に及び、更に江戸時代に於ける服飾界の特色は階級的定型の完成、即ち公家風、武家風、庶民風の三者の對立であることについて其各に於ける代表的型式に就いて概言し、終りに海外文化の影響に依る服飾界の動搖と洋裝の採用に就いて述べてある。全編叙述平明であつて、複雑なる服飾界の事

象をよく要を摘んで纏められ、殊に一々の出典を比較的詳細に擧げてあるのは斯界の研究者にまつて裨益する所が少くない。唯だ強ひて希望を云へば第五編中の服飾界の動搖及洋装採用の章に收めてある武家服制概要特に上下とその種類の項はやはり社會の階級と服飾定型の章中に收めてほしかつたことである。(四六版三五九頁、東京雄山閣發行、價二・六〇)〔松野〕

●海南小記

柳田 國男著

收むるこのころ海南小記、與那國の女たち、南の島の清水、炭焼小五郎が事、阿遲麻佐の島の五篇のうち、海南小記二十九章は大正九年十二月十九日より翌年二月九日まで著者が旅行された臼杵宮崎と北洲南東海岸より薩南諸島を經、沖繩群島に及び、更に先島列島に到る間の見聞録であつて、南國の風景文物風習は勿論、島々村々に残つて居る傳説やら古老の物語やら、或は村人の物語る珍奇談を夢のやうな美しい筆で叙述したもので、さかく單調に陥り易い旅行記をこれ位に面白く流暢にもせ

られたのは著者の筆致の自由な事の外に、郷土に関する深い理解と厚い同情とが然らしめたものである事は疑のない事であらう。殊に私は右敢當に關する著者の觀察に同意を表し、與那國の女たちの生活、炭焼小五郎の物語に思はず引き込まれて一氣に讀まされてしまつた事を白狀する。所々に地圖を挿入して讀者をして著者と共に其の境地にある思をせしめ、少ないながらも寫真版を以て説明を補ふて居るのは、此の種の著書としては是非かくあるべき事の範を示したものである。(四六版三七九頁、東京大岡山書店發行、價參・貳〇)

●郷土會記錄

柳田 國男編

編者や新渡邊博士を中心として明治四十三年秋に創立され大正八年末頃までに六十何回かの會合を開いていろく郷土に關する物語や調査や研究が行はれた郷土會の記錄で、主として柳田氏の手記によつて綴られたものであるらしい。郷土會例會の記事の間に、伊豆の白濱と丹波の雲原、三本木村與立の話、豊後の由布村、湯坪村と